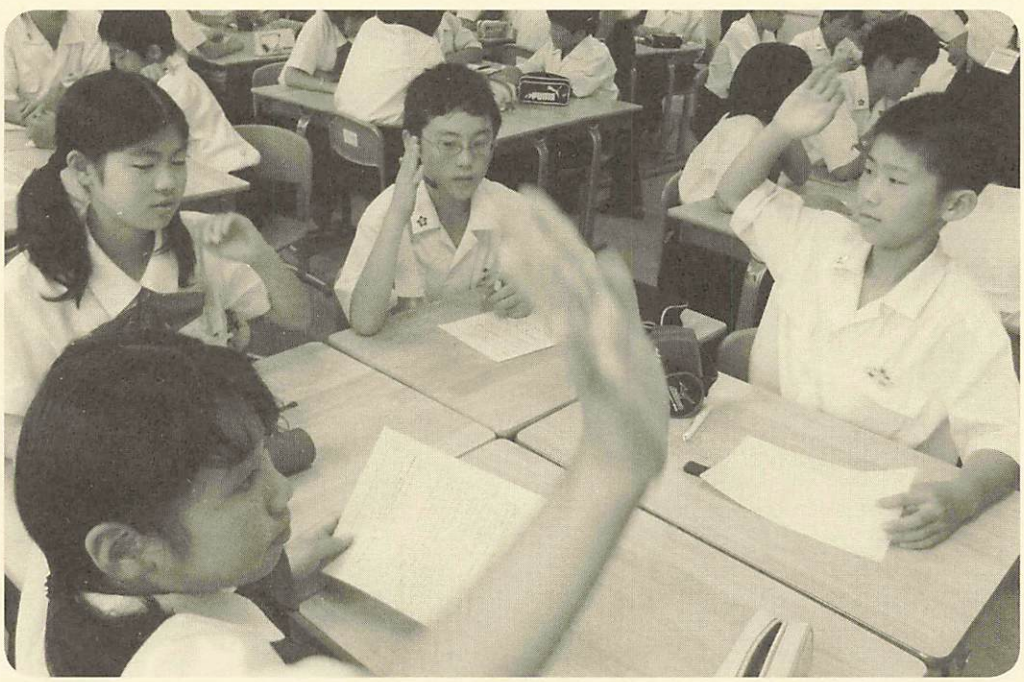
国語科

教科領域研究テーマ

【未来を拓く古典学習へ

— 思考力や想像力を養い,

自己表現力を高めるための古典学習指導の工夫 — 】



国語科

未来を拓く古典学習へ

― 思考力や想像力を養い，自己表現力を高めるための古典学習指導の工夫 ―

実　践　者　竹縄　隆子，大上　航太，梅木　香織
共同研究者　愛媛大学教育学部　佐藤　栄作，小助川元太，太田　　亨

第１章　はじめに

今年度より完全実施となった学習指導要領には「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が設けられ，古典の世界を楽しみ，古典に表れたものの見方や考え方に触れ，登場人物や作者の思いを想像することなどが内容に盛り込まれている。また，古典を中心とする伝統的な言語文化を理解・継承し，新しい文化を創造・発展させることが国語の指導において欠くことのできないものとして位置づけられている。さらに，学習指導要領の改訂によって，これまで古典入門の定番であった「竹取物語」「枕草子」「徒然草」「平家物語」などが昨年度より小学校でも扱われるようになった。したがって，中学校の古典学習は，今まで通りにはできない。しかし，それは，初めて見る文ではなくなるというだけのことであり，たとえ同じ文章であっても，小学校国語には小学校国語の，中学校国語には中学校国語の教えることがあると考える。中学校国語の古典学習は，今までのように初めて見る驚きには頼れないが，かといって高校の古典学習を前倒ししたような詳細な読解を行う授業を行うべきではないと考える。そこで，「未来のための古典学習」という視点を授業に取り入れることにより，小学校の古典入門時代から発展した中学校ならではの古典学習が行えるのではないかと考えた。そして，「未来」を生き，そこで活躍する生徒にとって身に付けるべき知識，技能，価値観とは何かを探りながらこれまで研究実践を行ってきた。その結果，生徒に自分の気持ちや考えを表現する自己表現力を身に付けさせることが重要であること，また，古典教材が，時を超えて変わらない人間の生き方や考え，あるいは時代とともに変化していくものを教えてくれるものであり，生徒たちが考えたり表現したりする意欲を高めるのに有効であることを確認した。

今年度は，昨年度までの成果を引き継ぎ，古典教材の情報を基に話したり書いたりする活動を通して，生徒の思考力や想像力を養い，自己表現力を高める学習指導をさらに充実させるべく本研究主題を設定した。さらに，このことが行えれば，自分の思いなどを素直に出したり，お互いのことを認め合ったりすることもできるようになり，「豊かな自尊心・自尊感情の醸成」につながるのではないかと考える。

第２章　研究の実際

研究（その１）

単元「古人の思い」における自己表現力を高める指導の工夫

（実践者）竹縄　隆子　（共同研究者）佐藤　栄作，小助川元太，太田　　亨

１　研究テーマ設定の理由

昨年度までも，古典作品を含む文学的文章の学習では，作品の中で使われている「言葉」に注目させ，「言葉」から想像を膨らませる学習活動を意図的に取り上げるようにしてきた。これまでも，短歌（連句）や古典作品を取り上げ，詩歌の創作に取り組む活動を行ってきたが，昨年度の取組では，時間内に詩歌の創作ができない生徒がいた。今年度は，個人差を考慮した創作をさせるときの工夫を考えていきたい。また，詩歌の創作活動を通して，思考力や想像力を養い，自己表現力（自分の気持ちや考えを表現し，伝える力）を高めていく古典学習を展開したいと考え，本研究テーマを設定した。

２　研究の内容と方法

(1)　自己表現力を高めるための学習活動の展開

古典作品の中に出てくる言葉を様々な角度から捉えさせ，創作活動を展開すれば自己表現力を高めることができると考える。

(2)　自己表現力の高まりを実感させる手立ての工夫

お互いに作った作品を鑑賞させる場を設定することにより，「できた」という達成感を味わわせる。

以上のことを通して，指導の工夫を行い，その有効性を考察するとともに，そこで得た成果や課題をさらに授業実践に生かしていくこととする。

３　研究の実際

単元名　「古人の思い」（第３学年）

本単元は，俳句や和歌，古文，漢文から作者の心に触れ，作品を楽しむことをねらいとしている。特に，古典作品は，現代と異なる言葉で書かれているため，生徒は難しいと思いがちである。しかし，読み進めていくと，今の私たちと変わらない心情や人生観を見いだすことができる。古典作品は，その作品が生まれた状況や背景を知ると，想像しやすくなり，現代を生きる自分たちと対照させて作品に込められた思いや主題を探り，感じ取ったり，イメージしたりする学習に適している。現代を生きる自分たちの目で古典作品を読み，共感や批評をすることで，古典を学ぶ価値や意味に気付くものと考える。

古典作品を通して，ことば遊びに触れたり，古文の音読の楽しさを感じたり，言葉の語源を知ったりすることで，「古典はおもしろい」ということを感じるのではないかと思う。また，そうすることで，今後の古典学習に受け身ではなく，積極的に自分から問題意識をもって読んでいく態度を養うことができるのではないかと考える。現代を生きる自分たちの目で古典作品を読み，古典の世界に触れていくことで，古典の価値や意味に気付くのではないだろうかと考えた。

担当学級の生徒（２クラス79名）は，読解力が比較的高い生徒が多く，授業に対しても意欲的に取り組んでいる。しかし，言葉からいろいろなことを想像することが好きな生徒は多いが，短歌や俳句を作る学習が好きな生徒は少ない。そこで，想像力を高め，感性を磨くために，実際に

感じていることを様々な言葉で表現させる機会を作ってきた。昨年の短歌の学習でも，上の句を提示し下の句を考えさせる活動を行ったり，友達の詠んだ上の句に下の句を付ける活動を行ったりした。また，俳句の学習では「最近，強く心に感じたこと」をテーマに創作活動を行った。そういった活動を受け，少しずつではあるが創作活動への抵抗は少なくなりつつある。そこで今回は，言葉を吟味させながら和歌をもとに創作活動を行わせ，伝統的な言語文化のおもしろさを味わわせたいと考えた。

単元構想（全19時間）

題　材	評　価　規　準	言語活動	時間
俳句の世界	◇作者の人間・社会・自然についての考え方を捉え，自分の考えを深めようとしている。 ◇俳句に込められている情景や心情を，季節や意味の切れ目などに注意して，読み味わっている。 ◇俳句独自の表現の仕方や特徴を捉え，俳句を詠んでいる。	鑑賞文 俳句の創作	6
和歌の世界	◇和歌独自の表現の仕方や文章の特徴，リズムなどに注意して，朗読している。 ◇和歌に描かれた時代背景や季節感，心情，情景などを思い描き，現代版の歌に詠み直している。 ◇和歌の中に表れている情景や心情について理解し，現代と比較しながら自分の考えを述べている。	和歌の創作 鑑賞文	6
おくのほそ道	◇文語表現のもつ語感やリズムを味わいながら，文語文を朗読している。 ◇俳文の表現の特徴や芭蕉の自然や人間に対するものの見方や感じ方を読み取っている。 ◇面八句を創作する際に，適切な言葉を用いようと言葉を吟味している。	文章の読み取り 歌の創作	4
中国の古典の言葉	◇漢文特有の言い回しに注意して，音読している。 ◇作者のものの見方や考え方を読み取っている。	音読 文章の読み取り	3

(1)　授業実践

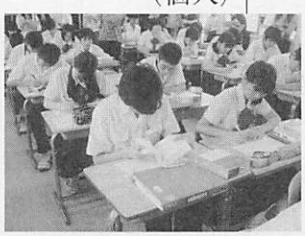
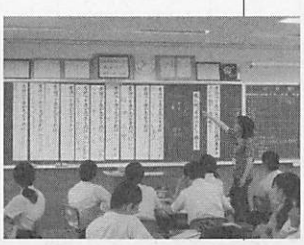
ア　ねらい

○　和歌を自分なりに解釈した上で，今を生きる自分たちの言葉で歌を詠むことの楽しさを味わう。

○　現代版の和歌に詠み直すことで，古人の思いを想像し，言葉を吟味する。

イ　展開

学習活動（形態）	時間	○教師のはたらきかけ　•生徒の反応	○指導の工夫◇評価(方法)
1「君待つと～」の歌を音読した。　(一斉)	5	○「君待つと吾が恋ひをれば我がやどのすだれ動かし秋の風吹く」の歌を読んでみよう。	○情景を思い浮かばせるために，リズムを意識させながら音読させた。

2　和歌の世界を確認した。 （一斉）	5	○「君待つと～」の歌をどう読んだか。 ・一晩中，好きな人のことを胸をときめかせながら待っていた様子。 ・季節が変わっても，ずっと愛しい人のことを待っている様子。 **現代版「君待つと」を詠もう。**	○この後の活動をスムーズにさせるために，自分なりの解釈を確認させた。
3　想像した情景を今に置き換えてみた。（個人）	5	○想像した情景を今に置き換えるとどうなるだろうか。 ・待ちながら，ずっと時計を見ている。 ・そんなに待っていたいということは，よほど好きな相手なんだな。	○歌を詠みやすくさせるために，待っているときの気持ちに重点を置くか，相手への思いに重点を置くかも考えさせた。
4　想像した情景を歌に詠んだ。 （個人）  **歌を詠んでいる様子**	20	○想像した情景を歌にしてみよう。 ・「君待つと吾が恋ひをれば」を最初にもってきて，想像した情景を五七五七七で表現するのは難しいな。 ・ときめきながら待っている様子をどう表現しようか。 ・家で待っているのではなく，いつも見かけるところで待っている様子を表現しようかな。	○歌を作らせるために，想像した情景に合うことばを考えさせた。 ◇情景を想像しながら和歌を詠むことができる。（観察・ワークシートの分析）
5　できた和歌を紹介し合った。 （小集団） ↓ （全体）  **全体で紹介し合う様子**	10	○作った和歌を班の人に紹介し，どのような情景を思い浮かべたかを述べ合ったり，アドバイスをし合ったりしよう。 ・ここのことばを変えたらもっとおもしろくなるよ。 ・「君待つと吾が恋ひをれば受信音ふと見た後に途切れる力」 ↓ 二つの意味を込めている。 ○作った和歌をクラスの人に紹介しよう。 ・うまく好きな人を待っている感じが出ているな。	○ことばを練らせるために，付せん紙を使って感じたことを書かせたり，アドバイスをさせたりした。  **班内で紹介し合う様子**
6　本時のまとめをした。（一斉）	5	○もとの歌をもう一度読んでみよう。	◇作った和歌をお互いにアドバイスし合い，言葉を吟味する。（観察・ワークシートの分析）

(2)　自己表現力を高めるための学習活動の展開の工夫

『万葉集』に載っている「君待つと吾が恋ひをれば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く」の歌を自分なりに解釈し，現代版の歌に詠み直させることで，より和歌の世界に浸ることができるし，自己表現力を高めることもできると考えた。

現代版「君待つと」を詠ませるために，この授業の前時に元の歌から読みとれる情景をいろいろ想像させた。たとえば，「君」と「われ」はどんな関係か。どのくらい待っているのか。どんな時間帯に待っているのか。待ちながら何をしているのか。部屋のどの位置で待っているのかなど。そして，時代的背景や歴史的背景などについても知らせた。そうすることにより，元の歌を自分なりに解釈をして創作活動に臨めた。

また，最初の二句「君待つと吾が恋をれば」までを固定することにより，元の歌から想像した情景を今に置き換えて歌に詠むという活動も抵抗なく取り組めた。

(3) 自己表現力の高まりを実感させる手立ての工夫

自己表現力の高まりを実感させるには，まずある一定レベル以上の作品を作らせることが必要であると考えた。上述（2）の取組の成果もあり，全員の生徒が時間内に歌を作ることができていた。全員が歌を作ることができていたので，班活動で付せんに感じたことやアドバイスを書かせたときにも，積極的に取り組めていた。自分の作った歌に友達がコメントをしてくれることも，「自分の作品を認めてもらった」という実感につながったようである。また，全体発表でも自分の作った歌と比較しながら鑑賞することができていた。興味深く，友達の作品を鑑賞し，そのよさを見付けようとしていた。

4 考察

(1) 授業研究の視点について

授業研究の視点	万葉集の歌を現代版の歌に詠み直し，小集団で言葉を吟味することは，想像力を高め，感性を磨くことに有効であったか。

研究授業を見ていただいた先生方の意見を以下に紹介する。

○万葉集の歌を現代版に詠み直すことは，伝統的な言語文化である俳句や短歌の創作への意欲につながっていたか。

○書き出しを固定することは，創作しやすくする点で有効。ある程度のレベルの短歌ができたという満足感，達成感が創作の意欲につながる。その点が重要。
○現代の生徒たちの生活に近付けて和歌に詠まれた情感を考える，作者の思いに寄り添って感じるということ，そして視点に書かれている想像力を高め感性を磨くことは十二分になされていたと感じた。それがひいては短歌の創作意欲につながったと思う。伝統的な言語文化に親しむ態度が養われていたと感じる。
○子どもたちの発想がユニーク。自由な想像や発言のできる雰囲気も含めておもしろい視点で意欲を喚起できたと感じた。
• なぜこの短歌を選んだのか。現代版に詠み直すという目的を考えた場合，もっと身近な歌があったのでは……。

○お互いの作った歌の情景を想像させることは，言葉を吟味することにつながっていたか。

○四人班の話合い以上に前に出された十首の情景を味わっている子どもたちの表情や歓声がよさを物語っている感じだった。
• 交流活動はよくしていたが，言葉の吟味については各自の内面で高まっていたと想像する。自評でも言っていたように，もう少し時間があればもっと吟味できてよかったのではと思う。

- もとの歌（万葉集）の鑑賞をしっかりすることも大事だと思う。
- 疑問に思う。想像した情景を伝えることはできていたかもしれないが，「言葉の吟味」には至っていなかったのではないかと……。「伝えた」「伝えられた」ことから再度自分の歌を見直し，言葉を考えさせる時間があればよかったのでは……と思う。
- 言葉の吟味というところには追い込んでいない。想像→吟味とつなぐところにもう少し手だてが必要。あるいは，生徒の創ったものに手を加える（若干の推敲）ところを見せる。

○その他

○生徒が生き生き活動する授業で楽しかった。
○付せんを利用して，感じたことやアドバイスを書かせていたのはとてもよかった。
- 「秋の風」にも何か意味があるのではないかと思う。「春」でもなく「冬」でもなく「秋」。「まっ白な歌」に「色をつけていく」そのつける色が生徒一人一人の思いで変わっていくのだろうと思う。〈現代版〉は，時間だけではなく，地理的な広がりがあってもおもしろかったのでは…。
- 「想像力を高め，感性を磨く」という大きなテーマに一つの単元の学習をつなぐのは短絡的にすぎる。この中間にあたる目標を設定すべきではないか。

(2) 生徒作品による生徒の実態と課題

「君待つと吾が恋をれば雨が降り傘ばかりの街たくさんの君」
「君待つと吾が恋をればバスが着き君を探して思わず背伸び」
「君待つと吾が恋をれば我が屋戸の戸の音ならすは母のいたずら」
「君待つと吾が恋をれば電車着き人をかき分け見つけた他人」
「君待つと吾が恋をれば我が心鐘と一緒に高く響く」
「君待つと吾が恋をればバスがつき君を探してもう七本目」
「君待つと吾が恋をればチャリの音かけだす思い兄に止められ」
「君待つと吾が恋をればチャイム音ガキにやられたピンポンダッシュ」
「君待つと吾が恋をれば電話の音きこえてきたのは『光にしませんか』」
「君待つと吾が恋をれば受信音ふと見た後に途切れる力」

資料１　完成作品

詩歌を中心とした創作活動を重ねてくると，創作活動への抵抗はずいぶん少なくなってきた。実際，今回の授業で歌を作ることのできなかった生徒はいなかった。また，お互いの作品の鑑賞も重ねてくると，自分の作品を紹介することへの抵抗も少なくなってきた。今回も「君待つと吾が恋をれば受信音ふと見た後に途切れる力」という歌を詠んだ生徒が同じ班の人に「『途切れる力』には，携帯電話の力（充電）が途切れるという意味と「吾」の力（気）が途切れるという二つの意味がある」と説明をし，その説明を聞いた班員が「携帯電話の力とは思いもよらなかった」と興奮して，授業後すぐに報告に来るなど意欲的に紹介し合っている。他の班では，全体に紹介する歌を一つ選ぶように指示をすると，よい歌が二つあるのでどうしても二つ紹介させてほしいと訴えてきた。

また，この授業のあとに他の和歌を選んで鑑賞文を書かせる活動を行ったが，和歌から読み取れる情景や心情を想像するだけではなく，今を生きている自分と和歌の世界を比較しながら自分の考えを述べている生徒が多かった。

しかし，授業を観察してくださった先生方からも指摘があったが，できた作品を紹介したり，鑑賞し合ったりはできたが，作った歌を吟味することが不十分であった。今後は，創作活動を行っ

た際，どう推敲をしていけば言葉を吟味することに効果的かを考えていきたい。

(3) 共同研究者より

古典文学作品の中でも，和歌（短歌）の鑑賞は，生徒にとっては取っつきにくいもの，教師にとってはできれば避けてとおりたいもの，といった部類に入るものなのではないだろうか。だが，やりようによっては，物語や随筆といった散文以上に，古典文学に親しむことのできる教材となるはずである。

鑑賞に際しては，今回の授業実践者が事前に行っていたように，和歌に用いられている言葉や表現を手掛かりにして，そこに描かれる基本的な情報･枠組みといったものを読み取ったうえで，作者が描こうとした情景や心情を，鑑賞者がそれぞれの視点から思い描いてみる，という手順を踏まなければならない。これらの作業によって，はじめて生徒たちは，作品の中に現代のわれわれが共有できる部分と相容れない部分があることを見いだすことができるのであり，さらには，日本人が古来からいかに一つひとつの言葉を繊細に扱ってきたかを知ることができるのである。

さて，古人の和歌を踏まえ，その世界観を現代のシチュエーションに当てはめて，和歌を創作してみるという今回の実践は，一種の本歌取り的な活動であるが，それはいわゆる本歌取りと同様に，生徒たちにとってみれば，本歌をいかに理解しているかを試される場であると同時に，五七五七七の定型に加え，最初の二句が固定されている，といった形式的な縛りの中で，いかに的確に自分の思いを詠み込んでいくかという，自己表現力を磨く場でもある。その意味では，中学生にとって，決して楽ではない，むしろ，困難なものを求められる活動であったはずである。それが困難なものとして終わらなかったのは，本歌の鑑賞をしっかりと行っていたことと，小集団で言葉を吟味するという実践方法によるところが大きいのではないか。

古典文学に親しむということは，ひたすら楽しい活動をする，ということと同義ではない。和歌の鑑賞や創作という活動の中で得られた新たな発見や達成感は，生徒の古典文学への興味や関心を高めるであろう。その意味で，今回の実践は和歌という伝統的な言語文化に親しませ，それらを理解させるための有効な方法であったのではないかと考える。

発句　草の戸も住み替はる代ぞひなの家
第二句　柱の傷も遠き思い出
第三句　冬の日の幼き頃に泣いた夢
第四句　今忘れゆくなつかしの日々
第五句　行く春へ気持ち新たに差し出す手
第六句　過去との決別甘き自分に
第七句　涙ふきひまわりのよう笑顔咲く
第八句　決意決めゆく誓いの雫

資料２　おくのほそ道　面八句

５　考察を受けた後の授業実践

今回の研究授業の後，「おくのほそ道」の授業で面八句を詠む活動を行った。面八句を詠む活動は，本研究の１年次にも行ったが，そのときには最初の「月日は」を読んですぐに行った。芭蕉の旅に対する思いや覚悟にあまり触れなかったためか，「面八句を詠んで芭蕉とコラボしよう」という目的で授業を行ったが，楽しんで歌を詠んだだけで芭蕉の思いにあまり触れることができなかった。そこで今回は，教科書に載っている章段「平泉」以外に「旅立ち」「遊行柳」「白河の関」「大垣」も読ませ，芭蕉の「漂泊の思い」や「古人への思い」などに触れ，なぜ死を覚悟してまで旅を続けたのかを考えさせた後，面八句を詠ませてみた。四人班で詠ませたが，自分の担当のところの句を詠んでいても困ったら，班員にアドバイスを求めてもよいこととした。また，第八句まで詠んだ後は，推敲をして完成したものを班の作品として発表した。次に示したものが，その時の作品である。

発句
草の戸も住み替はる代ぞひなの家
第二句
古き姿に背向ける涙
第三句
強がって新たな一歩また進む
第四句
畑の実のりで心は奮う
第五句
年は過ぎふと思い出す二年前
第六句
忘れられないあの日の想い
第七句
なつかしき風鈴の音と青緑
第八句
聞こえる先に君がいた町

資料３　おくのほそ道　面八句

今回は，自分の担当句はあるが，班の作品としたため，活発に推敲を重ねていた。また，困ったときにアドバイスを求めてもよいこととしたが，あくまでもアドバイスなので「前の句のこの言葉からこんなことが連想できるよ」とか，途中まで詠んでいるのなら「その言葉にはこんな言葉も続きそうだよ」というようなことを聞くこととした。創作の苦手な生徒もそういったアドバイスで歌を詠むことができていたようである。

全班の作品を発表すると告げたことも活発な推敲作業につながった。ただし，推敲をする際もその句を担当している生徒が納得した場合にのみ変更してもよいこととした。今回，グループ内で推敲の時間をかなり確保した。言葉を吟味させるためには，時間をしっかりとることと推敲の仕方の指示が大事だということを再確認した。

また，作品を作ったあとは必ず鑑賞を行っているが，鑑賞も自分たちなりに視点を絞ってできるようになってきた。例えば，資料２では「八句のなかで少しずつ前に進もうとする決意が感じられた。感情を直接表すだけでなく，何かに例えるなどして深いと思った。」「最初の部分に『暗』の部分の悲しい感じを漂わせ，後半に気持ちを切り替えて『明』の感じにしているのがよい。明暗がはっきりしている。最後の『誓いの雫』という言葉は鑑賞する人の心に残る」と鑑賞している。資料３では「情景がきれい。読んだあとにすがすがしいさわやかな感じがする。みずみずしいキラキラした印象を受ける。最後の方は，時間がゆったりと流れているようで言い表せない懐かしい気持ちになった。切なく温かい気持ちになる」「一組ずつでそれぞれ違う情景が浮かぶようだ。言葉の選び方が情景をふっと思わせるようでよい。読み終わったあと，懐かしさと同時に新たな一歩を進む気持ちにさせるところがよい」と鑑賞している。鑑賞することで，言葉により注目するようになってきたが，それだけではなく，他者の作品のよさを具体的に表現し，伝えることができるようになってきたと感じる。

研究（その2）

単元「先人に学ぶ」における思考力・表現力を養う指導の工夫

（実践者）大上　航太　（共同研究者）佐藤　栄作，小助川元太，太田　　亨

1　研究テーマ設定の理由

昨年度までの２年間の研究では，古典の中に表れる先人の生き方や知恵などを学び取り，それを自分の経験・価値観・感性などを基に言葉を用いて再構築し，考えを深めたり新しい発想を生みだしたりする力（自立の力）や，多様な価値観を認め，互いの個性を尊重したり，他と協調しながら進んで行動したりする力（共生の力）を養うことが，持続可能な社会を築く実践力を育てることにつながると考え授業実践を行ってきた。古典教材を契機とし，自分なりのものの見方や考えを書く活動や全体の場で交流する機会を有効に設定することで，古人のものの見方や考え方について多角的に捉えさせるとともに，思考力や表現力を高めることができた。研究の最終年次である今年度は昨年度までの成果を継続しつつ，単元の中で古典教材を有効に位置付け，そこで行う言語活動の内容をより明確にすることで，一層中身のある実践につなげることとした。

2　研究内容と方法

(1)　事前アンケート等による生徒の実態把握

(2)　古人のものの見方・考え方について理解を深め，自分なりの考えを表現する学習活動の実践

(3)　生徒の活動の様子やワークシート等の分析

以上のことを通して，指導の工夫を行い，その有効性を考察するとともに，そこで得た成果や課題をさらに授業実践に生かしていくこととする。

3　研究の実際

(1)　事前アンケート等による生徒の実態把握

○　与えられた課題に熱心に取り組み，自分なりの考えをもつことができる生徒が多い。

○　話合いに意欲的に参加しており，友達の発表に対して真剣に耳を傾けることのできる生徒が多い。

○　自分なりの考えを問う発問に対して，ワークシートなどに自分の考えを書くことはほとんどの生徒ができているが，常に進んで発言することができる生徒は学級（40人）の３分の１程度である。

○　すべての生徒が既に小学校で古典を扱った授業を受けている。扱われた作品には「枕草子」を始め，「徒然草」「平家物語」「万葉集」「百人一首」「春暁」「学問のすゝめ」などがある。

○　授業で行われた内容は「暗唱」「朗読」「かるた遊び」「原文と現代語訳を読み比べる」「古語の意味を調べる・覚える」「辞書を使って訳す」などで，今まで中学校で行われてきたことに近い内容を小学校で学習している生徒もいる。

事前のアンケート調査などにより，自分の考えを書くことで表現することはできるものの，自分の考えを場に応じて適切に発言することに対しては苦手意識をもっている生徒が多いことが分かる。ただし，お互いの意見を交わしながら自分の考えを深める活動についてはほとんどの生徒が熱心に取り組めているので，小集団活動の場を適切に設定することで，古人のものの見方・考え方について理解を深めるとともに，自分の考えを適切に表現する力を育てることができるので

はないかと考える。

また，今年度以降はすべての１年生が「枕草子」を中心とした古典教材を扱った授業を既に小学校で受けていることになる。中には，朗読や暗唱だけでなく，歴史的仮名遣いの学習や原文の訳，古語の暗記を授業で行っている小学校もある。中学校で古典教材を扱う場合には，教材によっては，暗唱や現代語で大まかな意味を捉える活動を既に行っている生徒，あるいはこれまで中学校でもやっていなかった，原文を訳したり，古語の意味調べを行ったりしている生徒，逆に初めてその教材に触れる生徒が入り交じっていることを踏まえた上で，古典の基礎を養い，我が国の文化や伝統についての興味・関心を深め，古人のものの見方や考え方，感じ方に触れ，古典に親しませる授業を構築する必要がある。

(2) 単元構想（全10時間）

本単元「先人に学ぶ」を全10時間扱いとし，表１のように学習内容，評価規準，単元で行う言語活動について構想を考え，授業を実践した。

表１　単元「先人に学ぶ」の構想

学習内容と題材	評　価　規　準	言語活動	時間
筆者が説明していることを読み取ろう。 「この小さな地球の上で」（説明文）	◇文脈に即して語句の意味を理解し，中心になる語句を的確に捉えている。 ◇文章の構成や展開を正確に捉え，内容の理解に役立てている。	○辞書を利用して文章における語句の意味を理解する。 ○文章における中心となる表現に着目しながら要約する。	4
筆者の考えを踏まえ，自分の立場を明らかにして意見文を書こう。 「江戸からのメッセージ」（随筆）	◇日常生活の経験をふまえ，必要な材料を集めながら自分の考えをまとめている。 ◇書いた文章を読み返して，読みやすく分かりやすい文章にしている。	○文章における筆者の意図や考えに着目しながら自分の考えをもつ。 ○自分の立場を明らかにして意見文を書く。	3
古典の世界に触れ，自分の体験を踏まえて文章を書こう。 「論語」（漢文）	◇漢文の表現の仕方や特徴に注意して朗読するなどして，その世界に親しんでいる。 ◇日常生活に関わることについて進んで文章を書き，考えをまとめようとしている。	○漢文を音読する。 ○自分の生活体験を踏まえて文章を書く。 ○自分の考えを小集団で紹介する ○自分の考えを全体で発表する。	3 本時 その2

(3) 授業の実際

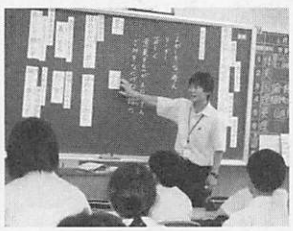
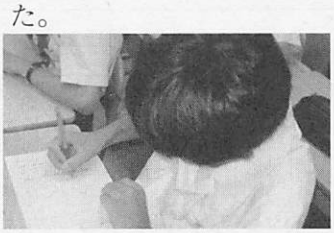
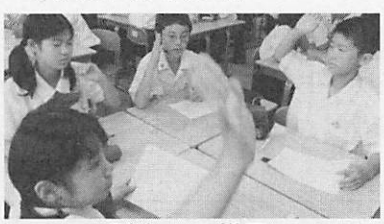
ア　ねらい

○　文語文の表現の仕方や特徴に注意して音読し，漢文独特のリズムに慣れ親しむ。

○　古典の世界に触れ，日常生活に関わることについて進んで文章を書く。

イ　展　開

学習活動（形態）	時間	○教師の働きかけ　•生徒の反応	○指導の工夫　◇評価（方法）
１　「論語」の文を紹介し，音読を行った。 （一斉）	5	○「君子は和して同ぜず。小人は同じて和せず。」を音読しよう。	○古典独特のリズムに慣れ親しませるために，繰り返し読ませた。

			◇漢文独特の表現に注意しながら意欲的に音読する。（観察）
2 「君子」「小人」について自分なりの考えを確認した。 （個人） ↓ （一斉）	5	○「君子」は具体的にどのような人か想像してみよう。 • 君子はリーダー的存在。 • 君子はしっかりしていてよい行いをする人。	○後で「論語」における「君子」「小人」の例と生徒がもつイメージを比較させるために，生徒がもつイメージをあらかじめ確認しておいた。
3 「論語」の表現を「君子」「小人」にあたるものに分類した。 （一斉）	10	○次に挙げる表現が「君子」「小人」のどちらに当たるかそれぞれ分類しよう。 A 驕りて泰ならず　C 諸れを己れに求む　E 泰にして驕らず B 義に喩る　D 利に喩る　F 諸れを人に求む	○対句表現など漢文特有の表現に気付かせるために，原文から「君子」「小人」の表現を除き，前半と後半を分け，無作為に並べたものを提示した。 ○意味が分かりにくい語句や漢字については説明を加えた。
 発問を行っている様子		• 肯定的な意味をもつ漢字が使われいる表現は「君子」にあたるのだろう。 • 似た形の文同士はペアになっている。	 ワークシートに記入している様子
4 並びかえた「論語」の文を基に，「君子」や「小人」がどのような行動をとるかを考えた。 （個人） ↓ （小集団） ↓ （全体）	25	「君子」や「小人」が実際にどのような行動をとるか考えよう。 • テストで先生が間違えてマルをつけていたとき，君子は「間違いです」と言って点を下げてもらう。小人は言わずにそのままにしておく。  話合いの様子	○「○○の（する）とき，君子は△△。小人は××。」という表現の型を与えることで，考えやすくさせた。 ◇「論語」の文を基に，日常生活に関わることについて自分の考えを書く。（観察・ワークシートの記述分析）
5 本時のまとめを行った。 （個人） ↓ （一斉）	5	○自分が最初に考えた「君子」のイメージと「論語」の君子像を比較し，「論語」や「孔子」について思ったことを書こう。 • 昔の人の考えだが今にも通じることが多い。 • 2500年前の孔子の言葉が論語となり現代にまで残っていることがすごい。	○「論語」が人としての在り方について書かれた文章であるとともに，今を生きる私たちにも示唆を与えるものであることを確認した。

4　考察

(1)　授業研究の視点より

授業実践において授業研究の視点を二つ設け，それについて考察を行った。

まず，研究授業を見ていただいた先生方の意見を以下に紹介する。

ア　「論語」の文章を基に具体的な例を考えさせることが，古典の世界に触れさせ，日常生活に関わることについて進んで文章を書く態度を育てる上で効果があったか。

○　古典を身近に感じさせ親しませることについて十分に効果があった。

○　古典の世界に触れ古典を現代に生きる自分とつないで見ていく態度を育てることにつながっていた。

○　間近にせまった宿泊研修の活動を例として挙げたことで，より身近に感じさせた上で考えさせることができた。

●「論語」を読みにとどめず君子と小人の捉え方について広げている点，さらに表現（書くこと）にまで発展させている点がとても面白かったが，一年生に要求するレベルとしては高かったのではないか。

●　一回の授業で到達する目標として「進んで文章を書く」は大きすぎる。もう少しスモールステップを踏んで到達させていくべきではないか。

イ　表現の型を与えたり，小集団活動を取り入れたりしたことが，自己を生き生きと表現したりお互いのよさを感じたりすることにつながったか。

○　発表することへの自信につながっている。難易度が高い上に複雑なことを要求しているにもかかわらず，最後のまとめのような意見が出たのがすごい。

○　今回１回限りでは難しいかもしれないが，これからつながっていくと思う。

●　型を与えるのは書くための一つの方法だと思う。１年生には無理かもしれないが，「型を破ること」にも挑戦してみる部分があってもよかったのではないか。たとえ失敗してもチャレンジを認めたい。

●　「自己を生き生きと」という視点が大きすぎる。つながらなかったとは言えないが，表現の型を与え小集団活動を取り入れさえすれば「自己を生き生きと表現…」できるようになるわけではない。

次に研究授業の最後にまとめとして生徒に書かせた「自分が最初に考えた『君子』のイメージと『論語』の君子像を比較し，『論語』や『孔子』について思ったことを書こう」について，主なものを以下に紹介する。

○　2500年前に書かれたものなのに今の人間と同じような考えをしていることに驚いた。いろいろな人の意見を聞くと，自分が小人だと思うこと，君子だと思うことのどちらもあった。

○　今も昔も「いい人」の基準は変わってないと思った。私も君子のような人になりたい。

○　2500年前の孔子の言葉が論語となり現代にまで残っていることがすごいと思う。

○　私たちの普段の生活に君子や小人を当てはめてみると同じ所がたくさんあった。昔の人の考えと現代の人の考えが重なることがすごいと思った。

○　君子について書いていることは今でも昔でも，国や時代を超えて大切なことであることが分かった。

○　今にも通じる昔の人の知恵はすごい。
○　論語の君子は「新しいことを初めてするような人」だと思う。孔子は君子と小人どちらだったのだろう。
○　最初は「君子」を男の人だと思っていた。でも意味は全く違うことを知った。君子は「どんな場でも対応ができる素晴らしい人」だと思った。
○　最初は君子を「ただのいい人」のように思っていたが，「責任感があり，えらそうにしない人」のことも言うことが分かった。
○　最初は君子のことを「自分中心の人」だと思っていたが，それは小人で，君子は「人への思いやり，自分への厳しさがある人」だと思った。
○　最初の君子のイメージは「尊く頭のよい人」であったが，君子の意味はそれだけではなく，「仁義を大切にしている人」であった。2500年前の人のよいところを見習う必要がある。
○　君子は「誰にでも平等で優しい神様のような人」というイメージがあったが，実際に考えてみると，「あまり目立たなくてもよい行いができる優しい人」のように思え，周りにたくさんいると思った。孔子も今の私たちと同じ考えだったのではないかと思った。
○　自分も一部小人に似たところがあった。利益にこだわるのではなく君子のように正義にこだわりたい。
○　孔子は，世の中の人が君子のようになってほしいという願いをもっていたのではないか。
○　孔子は君子側の人で，この社会に君子と小人両方いるからこそ，このような考えをもつことができたのだと思った。いつか自分も孔子のようになれるよう心がけていきたい。
○　君子のような人は最近あまりいないような気がするので小人にならないように努力したい。だが小人がいないと君子は存在しないのでは？みんなが君子だと成り立たないと思う。
○　昔のことが今に伝わってきて，君子とは何か，と考えると面白い。孔子も授業のように例を示しながら人々を君子にしていったのかもしれない。
○　論語をもっと知りたくなった。
○　論語という昔の文章を現代風にして学べたので興味がもてた。
○　論語は君子と小人の違いを比較していたので，君子のような人になることを広めるために作られたのかなと思った。君子のすごさと小人の小ささの違いを比べると面白かった。

研究内容の一つである，古人のものの見方・考え方について理解を深める学習活動についてであるが，「『君子』や『小人』が実際にどのような行動をとるか考えよう」のように，生徒自身の生活に置き換えて考えさせる活動を取り入れることで，より身近に古典の世界を感じられるようになることが分かった。特に2500年前の論語に描かれている孔子の言葉が現代の自分たちにも通じる，という趣旨の感想を半分以上の生徒が残している。また，最初に捉えていた「君子」のイメージが授業を通して変化したという生徒の記述も，より肯定的なものになった，あるいはより身近なものになったというものがほとんどであった。

他の記述では，「君子と小人両方いたからこそ論語のような考えが成立した」「実際に世の中が君子ばかりだと論語の世界は成立しない」「孔子も今回自分たちが教わったように例を出して君子像を説いた」という趣旨の記述が見られた。それぞれ，古人のものの見方を踏まえつつ，自分なりの見方で書かれた記述である。

研究内容のもう一つは，自分なりの考えを表現する学習活動についてである。「表現の型を与えたり，小集団活動を取り入れたりすれば，自己を生き生きと表現したりお互いのよさを感じた

りすることにつながるのではないか」という視点で日常の授業実践を行っており，今回の研究授業でもその視点で授業を見ていただいた。授業の様子，見ていただいた先生方のご意見からは，概ね達成できているということであったが，表現の型を与え，小集団活動を取り入れさえすれば即そのようになるのではなく，日々，小さなねらいを達成する活動を何度も繰り返して始めて，あるいは表現の型をやがては破ることが「生き生きと表現できる」生徒に成長することにつながるのではないかというご指摘を頂いた。まさにその通りで，一つは，同じ表現の型を押しつけるのではなく，学習内容に応じて多用な型を「手段」として身に付けさせ，その後身に付けたことを活用して自分なりの考えを表現できる場の設定を意識して行う必要があるということである。もう一つは，小集団で活動させる際，お互いの考えや発想の違いが出やすい発問の内容であっても生徒が進んで発言できるような手立てを考えた上で小集団活動をさせるべきであるということを再確認した。

(2) 共同研究者より

今年度より中学校の古典学習が大きく変わり，これまでのように古典の世界に触れるだけでなく，古典の世界を味わうことが必要となった。授業者は中学１年生に対して，古典の世界に入り込む第一歩として，『論語』を教材に取り上げ，漢文調のリズムを味わうことと，『論語』の言葉が現代にどのように通じるか生徒に考えさせることをねらいとし，授業を行った。授業を通して，このねらいは十分達成されたと言える。

授業者は，『論語』における「君子」と「小人」の比較に着目し，生徒に日常生活における「君子」と「小人」について考えさせ，それを型に当てはめて文章に書かせる作業を課した。さらに生徒が互いにその文章を発表しあうことによって，捉え方・考え方の相違を共有し，いっそう理解が深まるように工夫した。「型」を与えて文章を書かせる作業について，「型」がある以上，その文章に「生き生きと」が表れているかどうかを判断するのは困難である。むしろ，どれほど生徒が思考したか，その過程を見ることが重要であり，その思考が深化していれば，新たな世界・新たな自分を発見したことに繋がり，「生き生きと」と判断することができよう。と考えれば，生徒の感想は実に「生き生きと」している。『論語』の世界が古典の世界であると認識しながらも，現代の視点で内容をそしゃくし，新たな世界・新たな自己を発見している。そして，『論語』の世界にもっと足を踏み入れたいと考えていることが見て取れる。文章を考え，他者と意見を交わすことによって思考が練れた証拠であろう。昨今，古典の世界の入り口に立ちながら，その扉を開けることを拒む生徒も少なくない。しかし，本授業を受けた生徒には，扉を開けて，中をのぞき込んだ者，さらには一歩踏み込んだ者までいる。着実に古典の世界を味わう素地が養われていると言えよう。

このように生徒が古典に親しむ態度を身につけるには，授業者との信頼関係が重要である。本授業を参観すると，授業者と生徒の関係，教室の雰囲気が実によい。普段からの授業づくり，生徒との関係に真摯に取り組む授業者の努力の賜物によると言えよう。

５　考察を受けた後の授業実践

「表現の型を与えるなどして表現の『手段』を身に付けさせ，自分なりの表現ができる場を設定すること」「お互いの考えや発想の違いが出やすい発問の内容であっても進んで発言できるような手立てを考えた上で小集団活動をさせること」を意識して，「竹取物語」を扱った授業において次のような活動を行った。

(1) 冒頭の文章を暗唱し，歴史的仮名遣いや話の内容について確認する。
(2) 全文の現代語訳が書かれた文章を読む。
(3) 主な登場人物（かぐや姫・翁・嫗・帝・五人の貴公子）の人物像について，文章の記述を根拠として自分の考えをワークシートに書く。
(4) 小集団で意見を交換しながら発表資料を作成する。
(5) 全体で発表会を行い，気に入ったこと，気になったこと，疑問点を中心に意見交換をする。
(6) 「竹取物語に登場する人物と現代の私たち」という題で意見文を書く。

(3)では，登場人物の人物像についてまとめる際，根拠とした表現が載っている本のページ，表現の一部を記入させ，「AページのBという表現からCということが考えられる。そこで，Dのような人物であると言える」という形で人物像をまとめさせた。

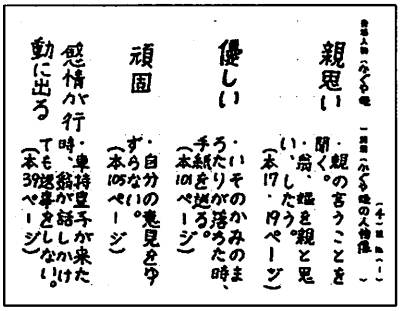
(4)では，発表資料を作成する際，提示用資料を作成させ，それには発表したいことの要点や図のみを載せることとし，発表する際には提示資料を聞き手に見せながら自分の言葉で発表するように指示した。（資料１・２）

(5)では，発表を聞く際，「聞き取りメモ」を作成させた。「聞き取りメモ」には，自分の考え（☆），疑問（？），特に大事（○），気に入った（気になった）表現（＿）というように，記号でメモした内容の区別をしながら記入するように指示した。意見交換の際には「気に入った表現」や「疑問」をきっかけとして発言させた。また，「聞き取りメモ」に「自分の意見」を10行程度で書く欄を設け，後で意見文を書く際に考える手がかりにできるようにした。（資料３）

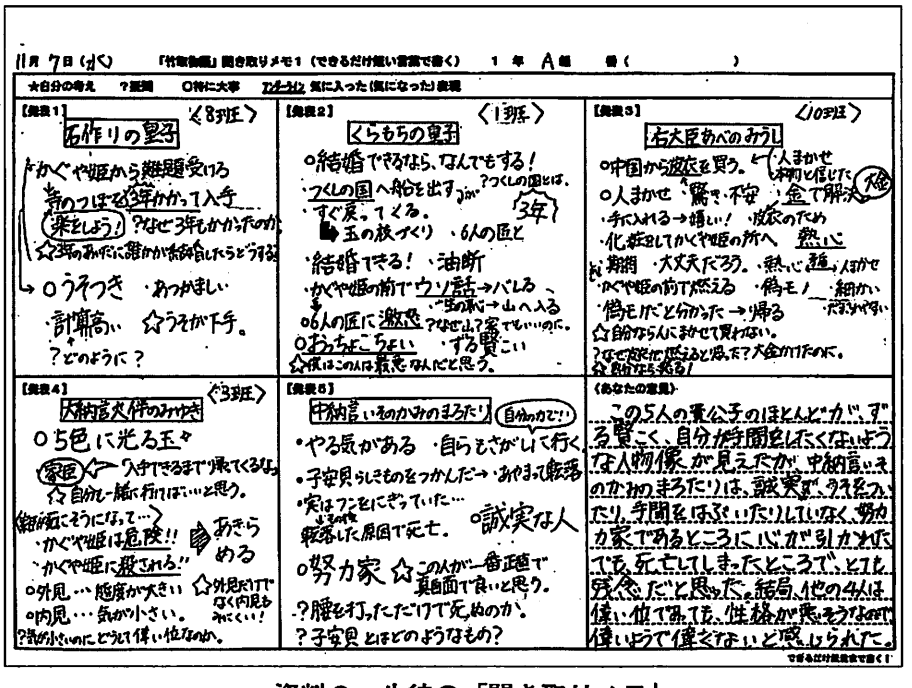
以上の活動を行った結果，生徒が発表する際，基本の形を踏まえながらも，自分なりの表現の仕方で発言する生徒が多く見られた。また，発表に対して自分なりの考えを発言することについてであるが，お互いの違いが表れやすい発問の内容であったにもかかわらず，学級のほとんどの生徒が挙手を行い進んで発表しようとしていた。自分が気に入った表現や疑問をあらかじめメモしているので発言しやすかったものと思われる。発言する際もメモを見ながら自分の言葉で意見を述べることができていた。



資料１　提示用資料１



資料２　提示用資料２



資料３　生徒の「聞き取りメモ」

研究（その３）

単元「いにしえの心にふれる」における思考力や想像力を養い自己表現力を高める指導の工夫

（実践者）梅木　香織　（共同研究者）佐藤　栄作，小助川元太，太田　　亨

１　研究テーマ設定の理由

時を越え，現代まで語り継がれる古典作品の魅力を知り，脈々と受け継がれる日本人の感性や命のつながりを感じることは，今後の自分の生き方を考える上でも重要であると考えられる。古典の中に表れる先人の生き方や知恵などを学び取り，それを自分の経験・価値観・感性などと比較して再構築する中で，考えを深めたり新しい発想を生み出したりする自立の力を養いたい。多様な価値観を認め，互いの個性を尊重したり，他と協調しながら進んで行動したりする共生の力を養い，社会で生きていく実践力へとつなげていきたい。古典教材の情報を基に話したり書いたり考えたりする活動を通して，生徒の思考力や想像力を養い，自己表現力を高める学習指導のあり方を明らかにすべく本研究主題を設定した。

２　研究内容と方法

(1)　事前アンケート等による生徒の実態把握

(2)　思考力・想像力を養い，自己表現力を高めるための学習活動の展開

(3)　生徒の活動の様子やワークシートなどの分析

３　研究の実際

(1)　事前アンケート等による生徒の実態把握（４月実施）

○　担当学級の生徒（１年生２クラス，80名）は，ほとんどの生徒が国語の授業が好きであり，明るく意欲的に授業に取り組んでいる。

○　国語の学習の中でも，小説や物語の読解が好きであり，登場人物の気持ちになって考えることが楽しいと感じている。

○　「話す･聞く」「書く」「読む」という領域では，圧倒的に「読む」ことが好きであり，「話す・聞く」「書く」が好きあるいは得意な生徒は，半数に満たない。自分の中で自由に想像できる読みの楽しさを好み，伝え合って考えを深めたり詩や文章を創作したりする活動には消極的な傾向がみられる。

○　現一年生より小学校の教科書にたくさんの古典が導入され，「枕草子」や百人一首をはじめ，多くの古典教材を学習して中学校に進学してきている。ほとんどの生徒が原文を読み，暗唱したり意味を捉えたりしている。習った古典の種類も古文や漢文など幅広い。

○　国語科の学習の中で最も苦手な分野が古典学習であり，半数の生徒が嫌いまたは苦手としている。その理由として，言葉の違いや意味が分からないといったことがあげられており，学習に対して抵抗感をもっている。反対に，国語科の学習分野の中で古典学習を好きだという生徒は，一番少なく，全体の１割である。

(2) 思考力・想像力を養い，自己表現力を高めるための学習活動の展開

ア 単元について

単元名 「いにしえの心にふれる」(第１学年)

本単元は「いろは歌」「七夕に思う」「竹取物語（蓬莱の玉の枝)」「故事成語」から構成されており，中学生になって初めて学習する古典を楽しむことを学習のねらいとしている。単元を構成する教材自体にさまざまな魅力があるため，それぞれの教材で焦点を絞り，楽しむ工夫をしていく。

まず，単元の扉として秋という季節の紹介がある。日本ならではの四季を五感によって感じ，いにしえの世界や古人との共通点を意識させるため，「秋来ぬと目にはさやかに見えねども」という和歌の下の句を作り，古典学習の導入とする。続く「いろは歌」や「七夕」に関する文章では，昔の人の思いや知恵を感じ，現代とのつながりを考えることができる。いろは歌が大変よく考えられて作られていることに感心したり，七夕の歴史を知り現代にも続く行事のよさや意義を見直したりすることができる。「竹取物語（蓬莱の玉の枝)」では，幼いころに親しんだ「かぐや姫」が，千年以上も語り継がれている偉大な物語であることを知る。そこに描かれた想像力豊かな世界や人間の思いは，現代にも通じるものがあり，その魅力にわくわくしたり偉大さに驚かされたりする。また「故事成語」は，現代の日常生活でも使われ，生き方を考えさせられる。これらの教材は音読にも適しており，生徒にとって親しみやすく共感しやすい。そのため，古典入門の生徒の興味・関心を高め，楽しく古典学習に取り組むことができる単元である。

単元構想（全15時間)

題　材	評　価　規　準	言語活動	時間
季節のしおり 秋	◇秋の訪れを短歌の形を使って表現し，日本ならではの季節感や文化を感じとっている。	和歌の創作	1
いろは歌	◇「いろは歌」について知り，古文のリズムを感じながら音読している。 ◇配置や字形に注意しながら「いろは歌」や俳句を書く。	音読	2
七夕に思う	◇七夕の歴史を知り，現代とのつながりについて自分の考えをもっている。		1
蓬莱の玉の枝 「竹取物語」から	◇文語表現のもつ語感やリズムを味わいながら，原文を朗読・暗唱している。 ◇内容を理解し，場面の様子や登場人物たちの思いを想像し，現代に通じる人間の生き方を考えている。 ◇作品のおもしろさを伝え合うことによって，自分の考えを深め，古典を学ぶ意義や楽しさを感じている。	音読 文章の読み取り 発表と意見交換	7 本時 その7
今に生きる言葉	◇漢文特有の言い回しに注意して音読している。 ◇いろいろな故事成語について理解している。 ◇適切な故事成語を使って体験文を書き，現代に生きる故事成語の価値について考えている。	音読 体験文の創作	4

イ　思考力・想像力を養い，自己表現力を高めるための学習活動の工夫

古典学習に対して「分からないから苦手」と感じる生徒が多い現状の中で，幼いころから誰もが知っている「かぐや姫」が，現存する日本最古の物語である「竹取物語」であるということを知らせ，驚きと親しみをもたせる。「かぐや姫」と若干の違いがあるところも，身近でありながら新鮮な発見ができ興味をひくと思われる。また「竹取物語」の作品自体が壮大で発想豊かであり，多くの謎も有しているため，生徒の思考力・想像力をかき立て，楽しみながら学習に取り組むことができると考える。そこで，単元の中でも特に「竹取物語」の学習に時間をかけ，時代を越えて受け継がれてきた古典作品のおもしろさや偉大さを感じさせることによって，古典学習への抵抗を取り除き，伝統的な言語文化のおもしろさを味わわせ，今後の中学校の古典学習に意欲をもって取り組ませたい。

また，授業での発言は意欲的に行っているが，伝え合って考えを深めたりすることについては消極的な面が見られる。そこで，「竹取物語」の魅力について自由に発想を広げ，自分の思いを素直に表現する場を設定し，表現する楽しさを味わわせる。発表の際には，共感できたところと予想できなかったことに視点をあてて聞かせる。視点を絞ることによって，自分と仲間の考えとを比較しながら考え，意欲的に理解を深めていくことができると考える。各班からの発表の後，質疑応答・意見交換の時間をとり，そこで，人と関わったり自分が情報発信したことについて仲間と考えを深めていったりする場を設ける。自分と違う考え方を知り，思いを伝え合うことによって，多様な価値観を認め，互いの個性を尊重したり考え方を広げたりする学習の楽しさを感じられるよう学習活動を展開する。

ウ　授業の実際

①　ねらい

○　友達に伝わるように表現の仕方を工夫して自分の考えを伝え，他者の発表を自分の意見と比べて聞くことで，考えを深める。

○　「竹取物語」のもつさまざまな魅力や古典の世界の豊かさに気付く。

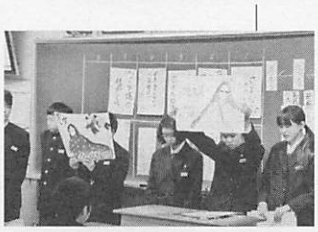
②　展開

学習活動（形態）	時間	○教師の働きかけ　•実際の生徒の反応	○指導の工夫　◇評価(方法)
1　「竹取物語」の原文を音読した。 (一斉)	5	○「竹取物語」の原文を読んでみよう。	○物語の内容を思い出させ，古典の雰囲気に浸るために，原文を音読させた。
2　本時の学習課題と学習内容を確認した。 (一斉)	3	**時を越えて語られる「竹取物語」の魅力に迫ろう！**	○発表を通して考えを伝えるとともに，他の班の発表を聞いて自分の考えを広げたり深めたりすることを確認した。
3　「竹取物語」の魅力について発表し合った。 発表	30	○発表の手順や約束事の確認をしよう。 • 今回は，内容をよく聞こう。 • みんなはどう思うかな。 ○各班からの発表を聞いて，自分はどう思うか考えてみよう。	○考えを深めさせるために，発表後，共感できたところと予想しなかったことの2点について意見交換することを伝え，意識をもって聞かせた。

→質疑応答
（全体）

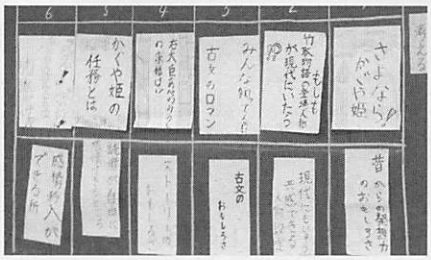


３班の発表の様子



５班の発表の様子

【各班から発表された
「竹取物語」の魅力】



- ここは同感だな。
- そういう考え方もあったのか。
- これは質問してみたいな。
- 発表の仕方を工夫しているな。

○発表を聞いて自分の考えがもてるように，ワークシートを用意した。

◇自分と比べながら発表を聞くことができる。
（観察・ワークシートの分析）

（例）６班の発表の様子



私たちは有名なかぐや姫と桃太郎を比べて，「竹取物語」のほかの物語との違いを出そうと思います。かぐや姫と桃太郎は，どちらもとても有名で，どちらも日常では起こりえないことを書いています。（劇を何カ所か挟む）

かぐや姫は竹から生まれ，桃太郎は桃の中から生まれます。発想としては一緒です。しかし，かぐや姫の感情がよく出ている場面では私たちも感情移入することができるのに対して，桃太郎は筋が単純で出来事を述べていることが多いので感情移入することができません。



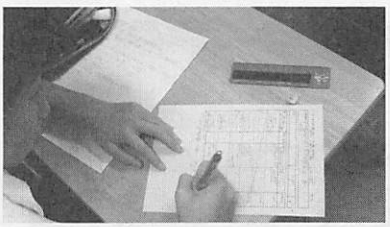
また，桃太郎はハッピーエンドで終わりますが，かぐや姫は月に帰ってしまって終わります。最後の終わり方も正反対ですが，私たちの興味をかきたて，どうしてそうなったのか，またその後を想像させるのはかぐや姫の方です。月に帰りたくないかぐや姫の気持ちにも共感できるし，その思いを忘れさせる羽衣も話の中に出てきます。作者の豊かな発想と物語のおもしろさに引き込まれるので「竹取物語」は，ほかの物語より断然優れていて，ほかにない魅力をもっていると思います。



感想発表

- たしかにかぐや姫の気持ちには共感できます。そういう面からも魅力を考えられるんだなと思いました。
- かぐや姫と桃太郎を比べていたので，とてもよく分かりました。
- 劇の脇役が見ている人の気持ちを言っていて，とても分かりやすかったです。おもしろかったし，プレゼンもよくできていました。

4　発表を振り返り，感じたことや考えたことを書いた。 （個人）→　（全体）	10	○今日の発表と意見交換を終えて，考えたことを書こう。 • いろいろなおもしろさがあったな。 • もっと詳しく調べてみたいな。	◇発表を通して得たことをもとに，「竹取物語」のおもしろさについて自分なりの考えを書くことができる。 （観察・ワークシートの分析）

5　次時の学習について知った。 （一斉）	2	• もう少し，うまく伝えられるとよかったな。  ワークシートの記入 ○次からは，中国から今の日本に伝わり生き続けている言葉について勉強しよう。	 全体の発表

(3)　生徒の活動の様子やワークシートなどの分析

授業研究の視点より

授業研究の視点	「竹取物語」の魅力を発表し他者の発表を自分と比べながら聞くことは，自分の考えを広げ，古典に親しませるために有効であったか。

研究授業を見ていただいた先生方の意見を以下に紹介する。

○　「竹取物語」の魅力を発表しあうことで，「竹取物語」のもつさまざまな魅力や古典の世界の豊かさに気付いたか。

○　生徒が素直で幼く，大変意欲的に発表や発言をしているのに驚いた。とても楽しんで古典の学習に取り組んでいたと思う。

○　あれだけの準備をするのが大変である。生徒の発想は柔軟で，見ていて大人がはっとするようなこともあった。視点がユニークである。他の御伽草子との比較や古文の文体に注目するような班の発表に感心した。

○　支持的な雰囲気があり，何を言っても受け入れる環境があるのがよかった。表現できる楽しさを感じたし，発表方法も工夫していた。意欲があると，時間も長くなりがちである。

○　古文の言葉遣いを難しいとマイナスに捉えるのでなく，興味深いものと面白がっている班があったのには感激した。（共同研究者より）

●　教師の関わりや場の設定が授業を決めるので，むずかしい。子どもの思うおもしろさから作品の魅力や古典のおもしろさを考えていくのもよい。

●　ワークシートに魅力について書かせるところを設けるなど工夫するとよい。

（○成果　●課題）

○　他者の発表を自分の意見と比べて聞くことで，意見や考えを広げ深めることができたか。

○　聞き取って書くことはなかなかできなかったかもしれないが，共感するところとあれっ？と思うところに注目して聞くことはおもしろかったと思う。

○　鋭い質問や厳しい意見を言える雰囲気があり，実際に発言した子もいたので，そのあたりをもっと深めていくとよかった。

○　自分の成長した姿を自分で感じることができたら理想的だと思う。

● 全部の発表をさせるとなると，やはり時間的に厳しい。時間に追われるようになると，考えを深めるというねらいに到達しない。

● 意見や質問を，もっと出させたらよかった。そこからやりとりが始まったら，考えを深めていくことができるし，自分たちの発表にたくさん意見を言ってくれることで自尊感情も育っていくと思う。

● 発表の場面設定は難しい。パターン化すると，深まりや練り合うところまでいかない。全部の班の発表ではなく，何かのテーマでお互いに練り合うところを設けたらよかったのでは。

○ その他

○ 三つのカードがあることで，本時の流れが生徒によく分かったと思う。

○ 意欲的に学習に取り組み自由に発言するよい雰囲気を持っている生徒たちなので，この授業までの魅力にたどり着くまでのつくっていく最初の授業なども見たかった。自立と共生というテーマにも繋がると思う。

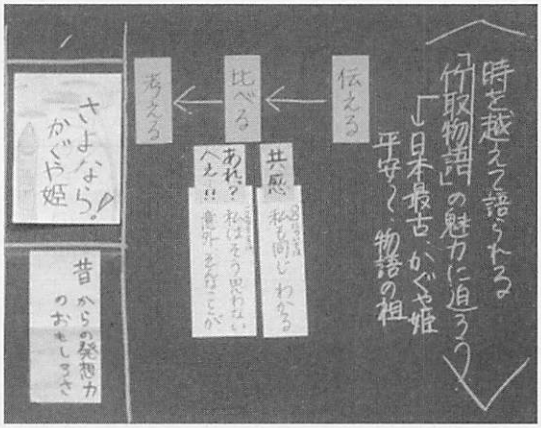
● 魅力を伝えようというと，何を魅力というのか難しいところだが，なぜ今でも千年前のものが残っているのかと考えると考えやすかったかも。

● 15時間という時数は，国語の年間指導計画の中で確保できるのか。

4 考察

(1) 研究授業より

生徒は，普段とは違いとても緊張していたが，時間が限られている中，よく活動していた。表現するのが楽しいというだけの時間にしたくなかったので，発表内容を班ごとに限定し質疑応答も視点をしぼって行った。自分たちの発表も他者の発表を聞くことも，楽しんで行っていた。「竹取物語」や古典の学習を楽しいと感じ，関心・意欲をもって取り組んだので，「古典に親しむ」という一年生の目標は達成されたと思われる。しかし，全班すべての発表にしたため，時間に追われ，発表や質疑応答の時間を十分とれなかった。そのため，意見を戦わせたり練り合うことができず，考えを深めるまでには至らなかった。意見を言いたい生徒たちなので，もっと質疑応答の時間をとることができると，考えも深まりや広がりを見せたと思う。欲張って１時間に詰め込もうとすると，なかなかねらいが達成されない。今回は，ねらい自体ももっと絞らなければならなかった。ここで何をねらうのか，どういった力を付けさせるためにどのような場の設定をするのか，基本に返って吟味する必要がある。



授業の流れ



生徒のワークシート

本時を振り返ってワークシートにみられた感想をいくつか紹介する。

○ 「竹取物語」の不思議さやおもしろさを感じた。似ているものがたくさんあって，とても楽しかったし，おもしろかった。新たに自分が今まで考えなかった魅力についても知ることができたので楽しかった。この学習によって，今まで難しく考えていた古文の文章を楽しく読めたのでよかった。他の古文も読んでみたい。

○ 千年以上も前に作られた話なのに，今と共通しているところがあってすごいなと思いました。また他の班の発表を聞いて，新しい魅力を感じ新たな発見をすることができました。「竹取物語」には，いろいろな魅力があっておもしろかったです。

○ 全体を通して，たくさんの「竹取物語」の魅力があって，自分の考えを深めることができました。もっと古典に触れていきたいです。

○ 一つの物語に対しての思いや考えが実に多種多様という感じですごいと思いました。受け取り方によって，見えてくる魅力も違うんだなと思いました。そして，あらためて「竹取物語」ってすごいと思いました。だから千年伝わってきたのだと思います。

○ 時を越えて，物語とともに昔から今に通じる考え方も伝わってきたのだと思う。昔と今では，環境などは大きく変わっているのに，人間の根本的なところは変わっていないと思った。「竹取物語」の魅力を改めて見直した。

○ 楽しんで発表することができたし，魅力も伝えられたと思う。他の班も，ひきつけられる劇やすてきな紙芝居など，たくさんの物と言葉で発表できていてよかった。発表の仕方で，伝わりにくいところ・伝わりやすいところがあったのもおもしろかった。

発表の仕方を限定し，聞き取る観点を提示したことによって，新しい発見や気づきは見られた。また，想像力を広げ，表現しようという意欲をもって学習に取り組むことができた。表現することの楽しさを知り，相手に自分の思いを伝える難しさには気づいたが，表現力を高めるまでにはいかなかった。表現力を高めるきっかけにはなったと思うので，今後表現力の向上に向けて，そのときどきに段階を踏んで力を付けていきたい。

(2) 古典の単元を振り返って

４月にとったアンケートでは，国語科の学習の中で，古典が最も嫌いあるいは苦手とする分野だったが，11月に行ったアンケートでは，古典が最も，苦手な人が少ない分野へと変化していた。同じように変化したのが漢字の学習であり，これは，続けて行っている漢字テストによって「できる」と感じる生徒が多くなったためだと考えられる。やはり「楽しい・できる・分かる」は，学習意欲につながると実感させられた。

以下は，11月に行ったアンケートの古典学習の感想である。

○ 最初，古典といったら難しいイメージが大きくて，古典の学習が始まると聞いたらとても嫌だったけど，学習してみると，自分の知らなかった昔をたくさん知れて，昔の人も今の私たちと同じように個性豊かな気持ちがあるんだなと親しむことができ，楽しかった。歴史の世界に入り込んでしまった。

○ 昔の人の考え方から，現代と違うところや似ているところをいろいろ発見できました。文から考えが広がるのもおもしろかったです。

○ 古文をすらすら言えるようになったのがとてもうれしかった。昔の人の心や生活についても知ることができるからおもしろい。今を生きる私たちと対比すると，さらにおもしろいから好き。

○　現代文は現代文なりに魅力があるけど，古典は，読んだり調べたりするのを重ねるうちに，古典の魅力をたくさんの視点で感じることができ，毎回の授業がとても楽しかったです。今回の授業で古典が好きになったので，これからも楽しんでいきたいです。
○　古典って，おもしろい部分が多くて楽しいなと思った。昔からの知恵や物語が分かり，とても楽しかった。自分でも調べてみたいと思った。
○　昔の文は，読むととてもいいリズムがあり，読みやすいです。昔の言葉などを聞いて，なんとなく伝わってくるところが，昔の人と繋がっているようでうれしかったです。昔も今も，やっぱり同じ人間なんだなと思いました。
○　古典を読むと，タイムスリップするような気がして不思議だと思う。現在と過去がつながっている感じがしてしみじみする。
○　古典のよさが伝わるような教え方を先生がしてくださって，とても楽しいです。昔から今に通じる言葉や人間の想像力を直に感じることができました。現代とリンクすることがたくさんあって，とても楽しい学習でした。
○　文におもしろさがあったり，内容におもしろさがあったりして，楽しかった。みんなで想像をふくらませてみると，とても楽しく，勉強することができた。

古典学習に対する抵抗感は少なくなったようである。古典作品のおもしろさを感じ，今の自分たちと比べることによって，思考を深めたり想像を広げたりしていることが分かる。今回は，単元を通して伝え合う場を設定することによって，考えを深めたり表現力を高めたりすることを意識して行った。興味をもって，魅力的な教材の中の古人の思いや現代とのつながりに想像を広げた。ワークシートの視点でメモを取りながら聞くことによって自分の思考を深め，その後質疑応答することで自分では思いつかなかった考えを知り考えを広げることができた。また，「竹取物語」の魅力を伝える発表の後には，「人に自分の気持ちを伝えるのは難しい」「伝わるところと伝わらないところがあった」という感想が見られた。発表する手法や自分たちが動く楽しさにとらわれがちだが，魅力を追究することで，何をどうやって伝えたらよいのかとか相手によく伝わるにはどうしたらよいかといった悩みも生まれた。やはり，目的や相手意識が思考力や表現力の向上には欠かせないことを実感させられた。今回は，ねらいを絞りきれず，思考力や想像力を養い自己表現力を高める入り口に立っただけの意欲付けに終わった感がある。今後も，考えを深め，自分の思いを自分の言葉で人に伝える表現力の向上や効果的な表現方法の選択に意欲的に取り組めるよう，経験を積ませたい。

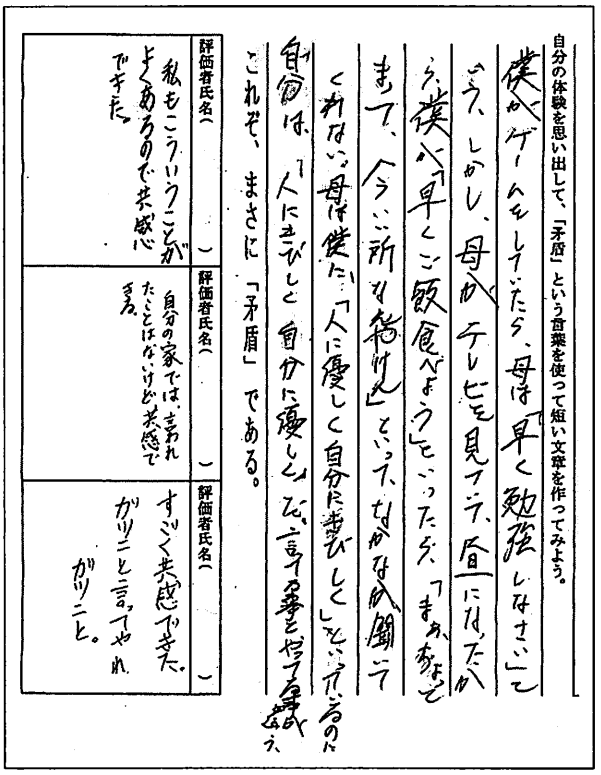
みんなで意見交換したり話し合ったりできるテーマや視点の設定についても検討していく必要がある。人前で話すことが苦手である生徒もまだいるが，意見をよせられたうれしさを感じており，他の人の発表を聞くことも楽しんでいる。このような経験を繰り返し積み重ねていくことによって自尊感情を高め，表現力を向上させていくことができると考える。

5　考察を受けた後の授業実践

今回の研究授業を終えた後，古典学習の最後に故事成語の授業を行った。テレビ番組などで取り上げられていることもあり，故事成語が現代にも生きている言葉だということは，生徒にも実感されていた。また，日本に伝わる古文と，中国から伝わってきた漢文との対比も新鮮であった。しかし，どちらも昔の難しい話ではなく，現代の自分たちと比較することによってそのおもしろさや学習の必要性を認識できると考え，現代の生活体験からたどりつく故事成語の紹介をさせ，それを批評し合った。

当初は個人での作文創作だけの予定であったが，グループでの発表も行い，さまざまな故事成

語について新しく知った。発表方法については，今までの発表を生かしてそれぞれ工夫していたが，前回の授業で十分に深まらなかった意見交換の時間を多くとり，最後に全体で，時代や国を超え，故事成語が現代に生き続けている理由について考えた。質疑応答の中でも，なぜその故事成語を選んだのかという点がよく議論され，自分が調べた言葉だけではなく，他の人が調べた言葉についても，より理解を深めることができた。知識として覚えるだけでなく，納得したり共感したり自分で使ってみたりして，理解が深まり言葉も定着していくのだと実感した。


自分の体験を思い出して，「矛盾」という言葉を使って短い文章を作ってみよう。

僕がゲームをしていたら，母は「早く勉強しなさい」と言うし，しかし，母がテレビを見ていたら，僕が「早くご飯食べよう」と言ったら，「まあ，あなたまで，人に所を指摘」といって，なかなか働いてくれない母は僕に「人に優しく自分に厳しく」と言っているのに自分は「人にきびしく自分に優しく」など，言っている事とやっている事が矛盾している。これぞ，まさに「矛盾」である。

評価者氏名（　　）
私もこういうことがよくあるので共感しました。

評価者氏名（　　）
自分の家では，言われたことはないけど共感できる。

評価者氏名（　　）
すごく共感できた。ガツンと言ってやれ。ガツンと。

生徒の個人作文

今回は，言葉についての理解を深めるといったねらいに重点を置いて授業を進めた。前回の研究授業のように，付けたい力を欲張りすぎると，結局何をやったか分からず力も付かなくなるので，今後もねらいを焦点化する必要がある。

今後も，楽しみながら学習し，日常生活の中で思いをはせたり使ったりすることのできる古典学習のあり方を研究していきたい。

第3章　おわりに

研究（その１）では，古典学習を通して，思考力や想像力を養い，自己表現力を高めたいと考え，本研究を進めてきた。そこで，今回は万葉集の歌を現代版に詠み直すという取組を行った。この取組は，和歌（短歌）の創作を通して，当時の人々の「ものの見方や考え方」をどう受け止めたかを表現する活動である。表現するためには，まず和歌を通して当時の時代的背景を知った上で，当時の人々の思いを想像することが必要である。この作業を行ったことにより，和歌の世界に浸ることができた。また，創作活動においては，時間内に歌を作るための手順を踏んだことにより，全員に歌を作れたという満足感を与えることができた。そのことにより，後の鑑賞では，お互いの作品のよさを認め合うことができ，また素直に自分の意見を述べることもできた。しかし，言葉を吟味することによって，想像力を高め，感性を磨こうと考えていたが，言葉を吟味することは難しい。創作活動を行う際には，できた作品をどう推敲するかをしっかり考えておく必要がある。

研究（その２）では，古典教材の情報を基に話したり書いたりする活動を通して，生徒の思考力や想像力を養い，自己表現力を高める学習指導の在り方を明らかにするため授業実践を続けてきた。扱う教材や活動内容を見直し単元の構想を工夫するとともに単元の目標を達成するために有効な言語活動を意識して取り入れることによって，思考力や表現力を養う指導が効果的に行えた。授業の中で，生徒たちは先人の思いに想像を膨らませながら自分なりの新しい発想や考えを意欲的に表現することができた。また，古典に描かれている世界や人物についてお互いに意見を交わし合うことで多様な考えを認め合うことができた。時代を超えて変わらないもの，時代を経て変わっていくものが存在し，長い時を経てなおも存在し続ける魅力をもった古典教材を扱った授業だからこそ表れた効果であると考える。研究の成果を踏まえ，今後も古典の世界を楽しみ，古典に表れたものの見方や考え方に触れ，登場人物や作者の思いなどを想像することができる授業を実践していきたい。

研究（その３）では，古典のおもしろさ・楽しさを感じる学習を通して，思考力・想像力を養い自己表現力を高めるための工夫を研究してきた。古典の中に表れる先人の生き方や知恵を学びとり，現代の自分たちと比べ，同じところや違うところに気付くことによって古典のおもしろさを感じ，楽しく意欲をもって学習に取り組んだ。興味がわくことによって，さらに学習を広げ，深く思考したり想像力を広げたりすることも分かった。また，伝え合う活動を取り入れることによって，表現する楽しさや考えが深まるおもしろさを感じ，次への意欲付けも行えた。力を付けるためには，まず学習意欲が高まらないと出発できないことを改めて実感させられた。

しかし，練り合う場面の設定にはかなり苦慮した。楽しく学習を進めるなかで，どの部分でしっかり考えさせ，どの力を付けるのか，教師が見通しをもってねらいを絞らなければならない。しかも，これらは一度の活動で形成されるものではなく，失敗や成功を重ねながら学び自体が成長することも感じている。そのため，今身に付けたい力とねらいを明確にし，生徒自身が自分の成長を感じ，さらに先に挑戦したくなる学習活動の工夫を今後もしていかなければならない。